

村研大会に参加して

奈良女子大学 村上弥生

今大会は、初参加と同時に新入会員登録をしていただき、私の村研との関わりの出発点となった。村研について少しは聞き、また会員の先生方のいくつかの業績を読んではいたが、今回の参加によって学会の性格やフレームワークといったものがおぼろげながら分かったような気がした。2泊3日の大会に参加しての雑駁な感想を述べさせていただこう。

エクスカーションというものは学会終了後に行くものだと思っていたが、ここでは初日に、しかもミニシンポジウムまである。小雨の中を都幾川村のそば道場に到着、天ぷらそばの並ぶテーブルにつき、初めて会員の先生方のお顔を眺めてみる。皆さんこの道場の木造りの建物にマッチした雰囲気がある。村の方からこの道場の運営方法などについてのアドバイスがほしいという要望があり、この会合の意味が了解できた。地域おこしのための有効な処方箋というものが切実に求められているということがよく分かる。ここでコンサルタント会社の出すような企画書が出せるわけではないだろうが、先生方が実地に歩き、見、かかわって来られた全国の事例のことを聞くだけでも視野の広がりや元気の元のようなものがえられるのではないかと思った。都幾川村の方々はどうだっただろうか。

次の日からのセッションは国立婦人教育会館を会場として行われた。初めてこの会館を利用するが、研修棟への道としてケヤキを生かした武蔵野らしい庭園の中を通るのはめずらしく、気分がよい。しかしこの名称と、開会時に会館側からの説明時間をとられるということには少し違和感を覚えた。利用者にとっては、限られた非常に貴重な時間なのに。

各セッションではテーマにそった研究発表と質疑・討論が行われて、教えられることが多かった。私自身の現在抱えている課題が、集落の人々の行う生業活動や行事の伝承といったことの元にある意欲のようなものが、どのように現実の活動に現れるのかを見極めたいということなので、「農村女性の社会的ネットワークを規定するもの」という原珠里氏の方法及び結論に興味を引かれた。その他の発表やそれへのコメント、議論中に示される考えの中にもアンテナに引っかかるものが多くあったように思う。農村の高齢化と地域福祉という共通テーマでの最終セッションでは村研とは違う立場の方々からの発表があり、テクニカルな面に偏っているという批評もあったが、討議の際には農山村の中で高齢化や福祉ということを実際の場で見、考えてこられている先生方から、現実的に必要な考え方などが具体的に示され、大変参考になるポイントを示していただいたと思う。

今後、国際会議を招致するかどうかの検討が行われるなど、国際的な活動がますます盛んになって行くという時期らしい。その場にいあわせ、見ていくことができるというのは貴重なことで、私自身も何かしらの関わり方ができるようになればと思っている。

(yayoi-m@cc.nara-wu.ac.jp)